

第 III 群 座長のまとめ

福井医科大学 耳鼻咽喉科

齋藤 等

この群はエアロゾルに関する基礎的研究である。

鼻アレルギーに対する温熱療法の有効性は報告されているが、その作用機序に関しては十分に解明されていない。菊守らは血流動態をスペクトル分析装置を用いて下鼻甲介粘膜前端で経時的に4週間観察している。その結果、症状の改善した症例では粘膜血液量の増加する傾向がみられたと報告した。例数も少なく、有意差はないが、今後の検討に期待したい。アレルギーに対する温熱効果として、ヒスタミンの遊離抑制、IgEのFc部分の熱による障害が報告されているが、血流増加が何故アレルギーに有効なのかという大事な問題が残っている。

IFN- α は上気道炎症の予防に有望な薬剤である。特にウイルス感染には理論的に有効なはずだが、有意差を証明できた報告は少ない。24時間投与し続けることが不可能であるのと感染の時期とのずれがその原因と考えられる。我々もインフルエンザ感冒の自然発生の多い1月～3月に二重盲検法で予防効果を比較したが、無症状で抗体価の上昇のないのは投与群で有意に多かった($P < 0.05$) (Rhinology, 23; 291-295, 1985)。佐藤らの報告では、超音波 nebulizer で投与する場合、160 Hz ではIFN- α の失活はなかったが、28 Hz という低周波では失活したという。機種選択を誤らないようにしなければならない。何故活性が低下するかは不明で今後に残された。

エアロゾルによる病態改善の基本には繊毛運動活性の改善がある。山田らは、細胞内蛋白リン酸化の面から生化学的に検討した。その結果、リン酸化が亢進すると繊毛運動活性が低下し、リン酸化が減退するとその活性が増加することを見いだした。しかもリン酸化亢進の蛋白がチュブリンと類似していた。チュブリン \equiv アクチンと考えられており、高エネルギーリン酸化合物である。繊毛運動のエネルギー代謝と関連して、今後に残された興味深いところである。

以上、この群ではエアロゾルに関する基礎的な研究発表であった。基礎なくして臨床の発展は有り得ないと考えるので、今後も地道な発展を期待するものである。